



この人の 沖縄力

99 おきなわりよく
いつも前向きで
決して後ろを振り返ることなく、
自由奔放に人生を切り開く、
ウチナーンチュの
バイタリティーのこと。



上/「オキナワ・ラティーナ」の公演に向けて子どもたちも猛練習。右上/関わってきた仕事の一部。



ニッケイのパワーを 沖縄から発信する

仲宗根ゆうこさん(沖縄本島)

文●太田雅子 撮影●嘉納辰彦

子もいます。ノーボーダーで沖縄とラテンをつなぐイベントだから、国籍問わず、やる気のある子をオーディションしました」

「オキナワ・ラティーナ」代表の仲宗根ゆうこさん(53歳)が言う。「オキナワ・ラティーナ」とは、沖縄とラテンを音楽で結ぶプロジェクト。2015年、ペルー出身の日系3世で、バンド「ディアマントス」のアルベルト城間さんの発案で始まった。沖縄で毎年イベントを開催するだけでなく、今年2月にはペルーで初の海外公演を

「いえ、ウチナーンチュです。でも、もし戦争がなかったら、ペルー生まれの日系3世だったかもしれない。母方の祖父母がペルー移民1世で、祖父母がペルーに渡ったとき、幼かった母は沖縄の親戚に預けられたまま、戦争で両親と生き別れてしまったんです」

第二次世界大戦で連合国側についたペルーは日本と国交を断絶。やがて終戦を迎えたが、親子が再会を果たしたときは、別離から30年以上の月日がたっていた。

「私が6歳の頃だったと思う。那覇空港で母と再会した祖父母が、突然カチャーシーを踊り出したのを、今も鮮明に覚えています」

仲宗根さんは北中城村で生まれ、コザ(沖縄市)の中心街で育った。両親ともに教育者で、父は「沖縄こどもの国」園長も務めた。

兄と弟に挟まれた長女で、男の子とばかり遊んでいるようなお転婆な女の子だった。そして中学からは大阪信愛女学院へ。

中学から親元を離れるとはびつくりだが、復帰直後の当時、教育熱心な家では、子弟を本土に送り出す風潮があったようだ。

「いきなり大阪弁の世界でメゲましたけど、沖縄なまりの大阪弁を面白がられてすぐに慣れました」

中学・高校と美術部で陶芸や絵画に親しみ、東京の文化服装学院へ。卒業後、会社勤務を経て、テレビ番組制作の仕事に就いた。ク

「オラ! コモエスタス?(やあ、みんな元気?)」

仲宗根さんが問うと、子どもたちが一斉に大きな声で応じた。

「ムイ・ビエーン!(元気だよ)」

9月某日、沖縄市のミュージックタウン音市場では、「オキナワ・ラティーナ」のイベントに参加する子どもたちが、ダンスや打楽器の練習をしていた。「日系ペルー人の子が多いけど、カナダやインドネシアのハーフの

敢行。大成功を取めた。仲宗根さんは、このプロジェクトの企画制作プロデューサーだ。

「ニッケイ(日系人)の創り出す、琴線に触れるようなサウンドや歌声を発掘して、日本、いや世界に広めたいと思っています」

移民1世の孫ユウコ

エキゾチックな風貌で「ペルー料理探究家」の肩書きもあるこの人、もしかや日系ペルー人?



周囲からジャングルと呼ばれるほど緑の植物が生い茂る庭は父・喜栄さんが丹精した。母・鈴子さんと。



リマで食堂を営んでいた祖父母。中央は曾祖父母。後列は、母が会ったことがなかった弟や妹たち。



ペルーを代表する料理「セビーチェ」は新鮮な魚のマリネ。いつか専門店をつくりたいと夢想している。

ペルーでの4年間

陶芸や琉球料理を習い、園芸の学校へ行き、それまで意識の向かなかった足元の沖縄を学んだ。そして2010年春、「母のルーツの国」ペルーへと旅立った。3カ月ほどのつもりで首都・リマの親戚の家に転がりこんだはずが、滞在は4年間に及んだ。「ペルー料理とその食文化が、あまりにも魅力的だったんです」ガチマヤー（食いしん坊）を自認する仲宗根さん。ペルー人の料理への過剰な愛と誇りに触れて、「すっかり魅了されました。料理の話となると、知らない人同士でも何時間でも盛り上がるんです」折しも、ガストン・アクリオというカリスマシェフの活躍で、ペルーの国は活気づいていた。「ガストンは、美食家を満足させただけでなく、貧しい子も学べる料理学校をつくり、生産者の地位も向上させた。料理が人と人をつ

イズ番組のリサーチャーから始まり、美容整形やアルゼンチンタンゴなどのドキュメンタリー番組の制作も手がけるようになった。「とにかく企画、企画、企画」というテレビ制作の現場は、超のつく多忙で過酷な世界。夢中で突っ走ったが、やがて疲れ果て、まったく仕事ができなくなる。「18年間テレビの現場で働いて、とつとと沖縄に逃げ帰りました」

活躍するニッケイ

世界中に約42万人の沖縄系人がいる移民県・沖縄は、5年ごとに大イベント「世界のウチナーンチュ大会」を開催している。昨秋の第6回大会で「オキナワ・ラティナ」は、キューバ移民をテーマにした音楽劇を上演し、カナダで活躍するバンド「金城プラザース」

なき、人種を超えて国の政治をも動かす力になっていったんです」うねりに遭遇した元テレビウーマンの感度がビビッと働いて、ペルー料理の魅力が日本の雑誌やメディアへ発信する日々が続いた。「ペルー料理は、アマゾン、アンデス、砂漠など、あらゆる気候の食材と、インディオ、白人、黒人、中国人、日本人……さまざまな民族のミックスの味。若い日系人シエフの、ペルーと日本を融合したニッケイ料理が美食家を虜にし始めていました」

2014年、両親が相次いで入院したのを機に帰国した。そして翌年、「オキナワ・ラティナ」の活動をスタートした。



小学生の頃から陶芸に魅せられてきた。自作の植物のための器。

や、アルゼンチン在住の歌手で医師の日系4世、グース外間を招聘して音楽イベントを開催した。「かつて移民した人の子孫が、今や3世4世の時代。日本語はできなくても、心に日本や沖縄を思う気持ちをもって活躍しています。縁あって私がプロデュースしているアルゼンチンのグース外間は、「僕は、ナニ人かと問われたら、アルゼンチン人でも日本人でもなく、ニッケイだと答える」と言うほど、ニッケイに対する誇りとアイデンティティーをもっている。ともすると「移民」「デカセギ」とくくられてマイナスイメージで語られがちな「日系」だけど、今や進化したかっこいい「ニッケイ」は、世界を動かすはず」

ニッケイに対する熱い思いがほとばしる仲宗根さんを、アルベルト城間さんはこう評する。「とにかく人を育てようという気持ちが強くて、僕にとって素晴らしい仲間であり、頼れるお姉さん。この国に取まりきらないウチナーンチュであり、日本人であり、ペルー人であり、地球人」

仲宗根さんの家には、年中さまざまな国の人が出入りし、さまざまな言語が飛び交っている。「我が家は一年中、世界のニッケイ大会！」「ニッケイ」という新しい文化に出会ったから、ニッケイをつなぎ、魅力を伝えていくことが、私の使命だと思っています」